

## 妊娠分娩と中高年婦人の健康に関する研究

東京大学産科婦人科

分担研究者 武谷雄二

要約：本年度のリサーチクエスションは次の4項目である。

①妊娠中毒症の既往を知りその後の健康管理をすることが、中高年の高血圧症の発症予防に効果的か。

②腎透析に至った患者は、高血圧、腎疾患あるいは糖尿病などの中老年疾患が進行しその最終段階にあると考えられる。現在腎透析を受けている女性患者には、過去の妊娠分娩時に将来の事態を予見できる症状あるいは検査所見が存在したのか。また、今後の妊娠分娩管理の改善により将来の腎透析に至る事態を避け得るか。

③産褥期の骨量の低下は自然回復しうるか。授乳期間の指導、栄養管理により骨量の低下を軽減できるか。

④妊娠・出産・育児期から将来の更年期障害の予防を目的とした健康指導を行う必要があるか。

検討により、以下の結果を得た。

(1)中毒症の既往のある婦人では、高血圧素因の有無が高血圧の発症を予測する因子となり、さらに体重増加が正常にコントロールされれば中高年の高血圧発症を予防できる可能性が示唆された。

(2)中毒症既往群は既往のない群に比して、最終分娩より透析導入までの期間は有意に短く、透析導入年齢も有意に若年であった。

(3)妊娠中は骨吸収の亢進・骨形成の低下傾向があり、産褥は骨吸収の低下・骨形成の上昇傾向を認めた。踵骨の骨密度は超音波では妊娠中は軽度低下傾向があり、産褥では明らかな変化は無く、更に産褥半年以内では授乳群と非授乳群にも差はなかった。

(4)妊娠・出産時の異常、内分泌因子、性格・心理的因子は、更年期障害発症に有意な影響を及ぼす可能性が強く示唆された。一方、総合指標としての社会的環境因子に関しては、更年期障害との関連性は少ないと考えられた。

見出し語：妊娠中毒症、高血圧、腎透析、骨粗鬆症、更年期障害、妊娠・分娩

研究方法、結果：1) 妊娠中毒症と中高年の高血圧症に関する研究

中高年の高血圧発症と妊娠中毒症との関係を検討するため、現在高血圧症を発症している中高年婦人（現在高血圧群）および高血圧のない中高年婦人（正常血圧群）を対象に、中毒症の既往、高血圧の家族歴、生活上の注意などについてアンケート調査を施行した。現在高血圧群では、正常血圧群に比して、中毒症の既往、高血圧素因保有率が有意に高率であった。また中毒症の既往、高血圧素因の有無にかかわらず、現在高血圧群では正常血圧群に比しBody Mass Indexが有意に高値で、中高年の高血圧発症に肥満の関与が示唆された。中毒症既往群において、現在高血圧群と正常血圧群との間に食生活や運動、仕事、睡眠などの日常生活上の相違は認められなかった。

2) 腎透析患者のretrospective research

全透析症例105例の基礎疾患としては、慢性腎炎が最も多く、次に糖尿病腎症が多かった。妊娠分娩産褥経過を十分検討できた55例のうち、妊娠中毒症の既往のあるものは37例（67.2%）であった。さらに、妊娠中毒症症例を、純粋型と考えられた中毒症後遺症を残さなかった群、純粋型と考えられるが中毒症後遺症を残した群、混合型妊娠中毒症と考えられる群の3群に分類し、分析した。透析導入のきっかけとなった疾患の症状初発年齢は、混合型が他の群に比較して有意に低く、また透析導入年齢も最も低かった。最終分娩より透析導入までの期間は、妊娠中毒症の既往のない群（20年）に比べて、妊娠中毒症の既往のある群（平均10年余り）はいずれも有意に短かった。

3) 妊娠・分娩と骨粗鬆症に関する研究

合併症のない妊婦、褥婦を対象とし、骨代謝マーカー、超音波による踵骨骨密度を妊娠初期より産褥6ヵ月まで経時的に測定した。その結果、妊娠中は骨吸収の亢進・骨形成の低下傾向があり、産褥は骨吸収の低下・骨形成の上昇傾向を認めた。踵骨の骨密度は超音波では妊娠中は軽度低下傾向があり、産褥では明らかな変

化は無く、更に産褥半年以内では授乳群と非授乳群にも差はなかった。即ち骨代謝回転と骨密度には良い相関性が認められた。

#### 4) 妊娠・分娩と更年期障害に関する研究

過去に経験した妊娠・分娩が後の更年期障害の発症に関与するか否かを解明する目的で、出産経験を持つ更年期婦人を対象に聞き取り調査を行った。簡略更年期指数の高い更年期障害群が、いくつかの調査項目において有意に高い出現率を示し、その項目間に関連性がみられたため、主成分分析を行い、妊娠・分娩と更年期障害を関連づける因子を明らかにした。また妊娠分娩前後の職業と更年期障害発症との関連性も検討した。

①流産回数、第1子妊娠中の蛋白尿や高血圧の出現、第1子出産時の産科手術の有無、新生児体重などの産科的要因、②月経周期が30代で規則的だったこと、月経時障害が30代で強かったこと、婦人科手術や乳腺疾患の既往があること、出産回数、流産回数などの内分泌因子、③出産時の医師、助産婦への印象が悪かったこと、授乳・育児に対する充実感のなかったこと、30代でスポーツをしていなかったこと、育児が大変だったという印象などの性格・心理的因子は、主成分分析により簡略更年期指数との間に有意な相関が認められた。すなわち、これら3因子はその後の更年期障害の発症に影響を与える可能性が示唆された。他方、核家族、第1子出産後就業していたこと、第1子出産時夫や自分の親の協力が得られたこと、出産回数、流産回数などの社会的環境因子は、簡略更年期指数との間に有意な相関がみられなかった。

#### 考察：

1) 今回の検討では、中毒症の既往を持つにも関わらず現在高血圧になっているものと、そうでないものの差を食生活や運動、仕事、睡眠など日常生活上の相違にもとめられなかった。これは中毒症発症の後、本人が十分な注意をしていた結果か、現在高血圧発症しているため生活により注意が払われている結果かこのアンケートの様式では判断できなかった。中毒症の既往を持ち、さらに高血圧素因をもつような婦人は中高年高血圧予備群であり、その後の体重管理を中心とした生活管理が高血圧の発症予防の一助になる可能性があ

り、継続的な指導が行われれば、中高年の高血圧発症率の減少が望めると考えられた。

2) 妊娠中毒症患者における腎疾患の存在を鑑別し早期に適切な治療を開始した場合、中高年に至っての腎透析症例を減少させ得るか否かを、今後はprospectiveな長期予後追跡調査により検討する必要がある。

3) 今回の結果は、産褥期に骨量は低下するという従来の説に対立して、骨代謝回転が骨形成優位であることを示している。すなわち、この期間に適切な授乳および栄養指導を行えば、より効果的な骨量の増加が期待され、更年期以降の骨粗鬆症を防止することができるはずである。今後は、半年以上の授乳の危険性も含め、長期にわたる産褥・授乳期の骨量および骨代謝マーカーの推移を調査する必要がある。

4) 今回は、主成分分析により多数の調査項目から、妊娠・出産時の異常、内分泌因子、性格・心理的因子、社会的環境因子という4つの総合指標を求め、簡略更年期指数との相関を検討した。この結果より更年期障害の発症には、過去の妊娠・出産時に出現した何らかの異常が影響するとともに、妊娠・出産とは直接的には無関係でも、その背景因子である内分泌因子も密接な関連性をもつことが明らかとなった。さらに注目されることは、性格・心理的因子と更年期障害との強い相関性である。妊娠・分娩・育児という大きな精神的肉体的負荷が加わると、その婦人の生来もつ性格に加え、将来の更年期障害発現を伺わせる特徴的な性格や心理的因子が現出されやすくなるのが、今回の調査で確認された。他方、社会的環境因子と更年期障害との関連性は認められず、当初の予想と相反する結果が得られた。社会的環境因子あるいはライフスタイルの更年期障害への影響を探究するためには、今後さらに対象を広げ、種々の階層・地域や様々な年齢の婦人に対しても同様の調査をする必要があると思われる。以上より、妊娠・出産・育児の後、早期に適切な健康管理とカウンセリングを開始した場合、更年期障害の発症を予防し得る可能性はあるが、prospectiveな調査も要求される。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:本年度のリサーチクエスチョンは次の4項目である。

妊娠中毒症の既往を知りその後の健康管理をすることが、中高年の高血圧症の発症予防に効果的か。

腎透析に至った患者は、高血圧、腎疾患あるいは糖尿病などの中高年疾患が進行しその最終段階にあると考えられる。現在腎透析を受けている女性患者には、過去の妊娠分娩時に将来の事態を予見できる症状あるいは検査所見が存在したのか。また、今後の妊娠分娩管理の改善により将来の腎透析に至る事態を避け得るか。

産褥期の骨量の低下は自然回復しうるか。授乳期間の指導、栄養管理により骨量の低下を軽減できるか。

妊娠・出産・育児期から将来の更年期障害の予防を目的とした健康指導を行う必要があるか。

検討により、以下の結果を得た。

(1)中毒症の既往のある婦人では、高血圧素因の有無が高血圧の発症を予測する因子となり、さらに体重増加が正常にコントロールされれば中高年の高血圧発症を予防できる可能性が示唆された。

(2)中毒症既往群は既往のない群に比して、最終分娩より透析導入までの期間は有意に短く、透析導入年齢も有意に若年であった。

(3)妊娠中は骨吸収の亢進・骨形成の低下傾向があり、産褥は骨吸収の低下・骨形成の上昇傾向を認めた。踵骨の骨密度は超音波では妊娠中は軽度低下傾向があり、産褥では明らかな変化は無く、更に産褥半年以内では授乳群と非授乳群にも差はなかった。

(4)妊娠・出産時の異常、内分泌因子・性格・心理的因子は、更年期障害発症に有意な影響を及ぼす可能性が強く示唆された。一方、総合指標としての社会的環境因子に関しては、更年期障害との関連性は少ないと考えられた。